

## ガリラヤ、そこでイエス様にお目にかかる

ハレルヤ！復活なされたイエス様の恵みが、皆さんと皆さんの家庭に豊かに満ち溢れますようにお祈りいたします。

コロナ禍はすべての人にとって長い長い試練になりました。ことに信仰者たちにとっては信仰の試みになったと思います。コロナ禍で私たちの信仰が揺らいでしまったり、長い間礼拝が中止され、私たちの信仰が薄くなったりもするからです。果たして、私たちはこの試練と試みをうまく乗り越えていくことができるでしょうか。そうです。私たちはこの試練と試みをうまく乗り越えていくことができます。

けれども多くの人々が恐れに捕らわれています。感染の恐れはもちろん、失職、不自由、孤立や人間関係が遠ざかることなど。けれども、信仰者たちにとっては決して恐れることではありません。復活のメッセージが勇気を与えてくれるからです。それでは、今日の私たちのための復活のメッセージはどのようなものでしょうか。

イエス様が亡くなられた後、すべての弟子たちは恐れていました。遠く逃げた弟子たちもいれば、どこかに隠れた弟子たちもいました。それだけではなく、絶望もしました。イエス様が亡くなられると、弟子たちはイエス様に抱いていた期待もろとも、すべてが終わったと思ったからです。

けれども、今日の福音書に出てくる婦人たちにとっては他の弟子たちとは異なるところがありました。それは、「恐ろしいけれども自分がなすべきことをしなければならぬと思っていた」ということです。彼女たちはイエス様の遺体に油を塗ろうと安息日の翌日、朝早く、日が出るとすぐ墓に行きました。そしてこのように話し合いながら心配しました。

「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」(マルコ 16:3)

イスラエルの墓の入り口のふたは、丸い円形の石で作られていたので、三、四人でも開けにくいのです。しかも朝早く墓に人がいるわけでもないでしょう。三人の婦人たちにはできないことでした。

ところが、墓に着いた婦人たちは驚いてしまいました。すでに、墓を塞いでいた大きな石が転がしてあったからです。その時、婦人たちは「誰かがイエス様の遺体を何とかしたのではないか」と思ったでしょう。婦人たちは墓の中に入りました。予想通り、イエス様の遺体はありませんでした。そこには白い長い衣を着た若者がいて、若者が婦人たちに声をかけました。婦人たちは震えあがり、正気を失って、墓を出て逃げ去ってしまいました。

けれども、婦人たちが墓に行く時話した言葉に注目してみてください。婦人たちは「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるのでしょうか」と話し合いました。彼女たちの望み通り、すでに墓の入り口の石は転がされていました。けれども彼女たちはとても恐れていて、自分たちが話し合った言葉と現実を考えてみる余裕がなかったのです。私たちもこの婦人たちと似ているのではないのでしょうか。この婦人たちのようになつたら、自分の置かれている現実をよく考えることができないまま、恐ればかり先立ちます。私たちが直面するコロナ禍の現実も同様です。恐れてばかりの人が多いのです。けれども、重要なことは現実を直視することでしょう。

心理学者たちは、恐れは、自分が直面する苦しみと脅威から逃れるための自然な反応であると言っています。けれども恐れは、理性と考えを硬直させ、問題の本質をちゃんと見ることができないようにさせます。ギリシア神話に出てくるメドゥーサ (Medusa) の物語がそれをよく示しています。メドゥーサの顔を見た人は、皆石になって死んでしまいました。これは、メドゥーサが恐れしるしの徴であり、恐れは人々の思考まで硬直させる、という意味です。けれども、ペルセウス (Perseus) は青銅の盾に映ったメドゥーサの姿を見て、メドゥーサを殺すことができました。これは、恐れをどう乗り越えられるのかを教えてくれるものではないのでしょうか。

私たちにとって盾になるものはないのでしょうか。私たちにとってはみ言葉と信仰が盾です。恐れの中にもみ言葉を記憶し、神様のみ力に頼って生きていけば、苦しみと脅威の現実を乗り越えることができます。天使の最初の言葉がそれを示しています。天使はこのように言いました。

「驚くことはない。」 (マルコ 16:6)

イエス様は公の働きを始めた後、弟子たちに何度も「恐れることはない」とおっしゃいました。ある神学者は、「聖書には『恐れるな』というみ言葉が三六五回も出てくる」と言い、それは私たちの毎日を守るためのものであると説明します。実は、怖がっても直面した問題が解決するわけではありません。重要なことは神様のみ言葉とみ力に頼り、現実と自分の課題を把握することです。天使はこのように言いました。

「行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」 (マルコ 16:7)

ところで、ガリラヤでイエス様に再びお目にかかれるとはどういう意味でしょうか。ガリラヤはずいぶん昔から差別と収奪を受けた所でした。ユダヤ人も、「異邦人のガリラヤ」と呼んで蔑んでいました。けれども、ガリラヤはイエス様がお育ちになった所であり、公の働きをお始めになった所です。弟子たちをお呼びになり、福音を宣べ伝え、病に苦しんでいる人たちを癒し、傷ついた人たちを慰め、絶望した人たちに希望を与えてくださったところで

した。弟子たちはイエス様に会った後、どれほど嬉しかったか分かりません。彼らは、イエス様を通して救いの出来事がどのように起こるのかを目で見て体験することができました。それゆえ、「イエス様にガリラヤでお目にかかれる」という話は、まさにこのような人生の現実の中で復活なされたイエス様に会うことができるという意味です。

弟子たちはガリラヤに帰ってきました。皆さんもご存知のように、ペトロと他の弟子たちは再び漁師の仕事を始めました。過去の日常生活に戻ったのです。けれども彼らはガリラヤの湖で魚を取っているうちに、復活なされたイエス様に会いました。その後弟子たちはどうなったのでしょうか。皆さんもご存知のように、弟子たちは恐れ の根源地であるエルサレムに行きました。そして、そこで大胆に福音を宣べ伝え始めました。弟子たちは復活なされたイエス様に会い、絶望の代わりに希望、挫折の代わりに勇気を得たのです。これが教会の歴史でもあります。

私たちはコロナ禍によって、ここ1年の間多くの恐れと挫折を経験しています。ご一緒に礼拝をささげることすら出来ませんでしたし、教会での信仰活動も出来なかったのも、無気力にもなりました。「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるのでしょうか」という婦人たちの声は「誰がコロナ禍の状況から抜け出させてくれるのでしょうか」という私たちの声のように聞こえます。しかし、私たちのそばにも天使が近づいてきて、この状況のなかに信仰者が生きていく方法を教えてください。これが今日の復活のメッセージです。

試練の時間、苦難の時間は、世の中の目で見ると、命が滅びていく時間です。けれども、神様の側から見ると、新しい命が始まる時です。この世の中の人々は、敗北し、失敗し、喪失し、別れることになると思うかもしれませんが、私たちが神様に頼って生きていく限り、敗北し、失敗し、喪失し、別れることはありません。神様は命と希望の源であるからです。

天使は今日の私たちにも「ガリラヤへ行きなさい」と言っています。このメッセージは、神様が私たちの日常の中にもいつも共におられる、という約束でもあります。たとえ、恐れ、挫折、絶望が私たちを取り囲んでいても、私たちはこの約束とみ言葉によって生きていくことができます。ですからコロナ禍でイースターを迎えた私たちも、たとえ共に礼拝を捧げることができなくても、信仰の原点に戻って、初めて神様に私たちの信仰を告白した記憶を通して私たちの信仰を堅固にすれば、神様はきっと恐れに打ち勝って、堂々とこの世を生きていけるように助けてくださるでしょう。

今日ご一緒に読んだ旧約聖書にはこのように記されています。

「万軍の主はこの山で祝宴を開き、すべての民に良い肉と古い酒を供される。」(イザヤ 26:6)

このみ言葉も、神様がこのコロナを終息させ、私たちを日常に戻らせてくださるだけでなく、豊かな恵みを与えてくださるという約束でもあります。

もう一度、復活なされたイエス様の恵みが、いつも皆さんと皆さんの家庭に満ち溢れますように心よりお祈りいたします。